様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０４６９

研究課題名（和文）コミュニケーション行動評価概念の日中対照研究

研究課題名（英文）A Comparison on the Evaluating Concept of Communicative Behavior in Japanese and Chinese

研究代表者
陶　琳（TAO, LIN）

金沢大学・人間社会環境研究科・客員研究員

研究者番号：００５８４００４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はコミュニケーション行動評価概念の日中対照研究の基本的枠組みによって，日本語と中国語辞書と類語辞典、日中・中日辞典など調査された関連語彙の分布状態と比較し、コミュニケーション行動概念についてその肯定的、否定的および過剰評価のそれぞれの類似点と相違点が抽出され，日中言語の評価語彙の特質及び対人関係に対する配慮行動の文化の特徴を考察した。また日中両国の大学生と市民に対して評価概念の意識調査を行った。それによって現代日本と中国社会で通用している評価概念の特徴およびそれぞれの言語文化圏の価値観や規範の相違点を実証的に明らかにしようと試みた。

研究成果の概要（英文）：According to the basic outline for contrastive research on the evaluating concept of communicative behavior between Japanese and Chinese, this study researched the distribution of related vocabularies from Japanese dictionaries,Chinese dictionaries, synonymous dictionaries, Japanese-Chinese dictionaries and Chinese-Japanese dictionaries. We abstracted similarities and differences among affirmative, negative and surplus valuations on the evaluating concept of communicative behavior between Japanese and Chinese. We studied the characteristics of evaluating vocabularies between Japanese and Chinese, as well as the cultural features considering behavior about personal relations. In addition, we conducted opinion polls of the evaluating concept among university students and citizens of Japan and China. It proved the features of the evaluating concept in use, in modern Japan and China, and the differences of people’s sense of values and norm of respective language and cultural background.

研究分野：言語学

キーワード：コミュニケーション行動評価概念　対照意味論　ポライトネス　対人配慮行動　価値観　異文化コミュニケーション　日本語　中国語

１．研究開始当初の背景

グローバリゼーションの拡大にともない，異文化間のコミュニケーションでは誤解が頻繁に起こる。誤解は，話し相手の用いる言語の知識が互いに不足していること以外に，文化や社会によって異なる価値体系が原因となることもある。近年、対人配慮行動（ポライトネス）との関連でそのような社会的文化的背景の違いを明らかにするために、対人配慮行動にかかわる語彙に着目してコミュニケーション行動評価概念（evaluating concepts of communicative behavior）の対照意味論的研究が行なわれるようになってきた。コミュニケーション行動評価概念とは、たとえば、「丁寧な」「礼儀正しい」「彬彬有礼」「傲慢」「礼儀知らずで」]、といった、コミュニケーションにおいて当該社会で通用している対人配慮行動の規範を背景に、相手や自分の行動をメタ・コミュニケーション的に肯定的ないし否定的に評価する概念のことである。

これらの概念は、個別社会のコミュニケーション行動の規範を反映している可能性が高いので、コミュニケーションにおいて何に注目しながら行動することが個々の社会で期待されているのかをさぐるための糸口として利用することができる。異文化間コミュニケーションにおいて、それぞれのコミュニケーション行動の背後にある行動規範や価値観の異同を知ることは不必要な誤解を予め避けるためにも重要である。行動規範にそった行動は、「当たり前」「自然」「普通」と評価され、コミュニケーションにおける「通常性」を構成する。そのような「通常性」から逸脱した行動が肯定的・否定的に評価されるのである。

この分野の研究として，日米，日独，日韓，日中の比較研究はあるものの，日本語と中国語の評価概念の対照研究はこれまで十分されていない。日本人と中国人の接触が日常的になっている今日，この分野の研究はコミュニケーションの障害を予め防ぐためにも不可欠であろう。そこで，また、この研究から、異文化間コミュニケーション・ギャップを解消するための的確な情報の提供を行うことを目的とする。

２．研究の目的

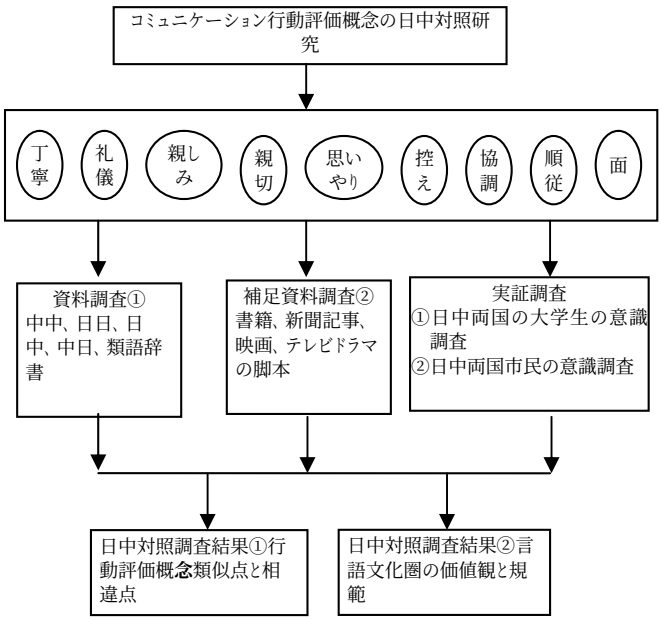
本研究の目的は、第一に、日中言語におけるコミュニケーション行動評価概念について①丁寧、②礼儀、③順従、④親切、⑤思いやり、⑥控える、⑦親しみ、⑧協調、⑨面子を中心にして、複数の辞書に共通する記述にもとづいて、各概念についてプラス語彙、マイナス評価語彙、過剰(マイナス)の語彙を収集し、辞書の語義記述を用いて評価概念の語彙を分析し、それぞれの類似点と相違点及び対人関係に対する配慮行動の文化の特徴を明らかにする。また中国語の礼儀、文化が紹介されている書籍、新聞記事、映画、テレビドラマの脚本等で補足しながら関連語彙を収集し，日本語の対応関連語彙と比較する。それによって現代中国と日本社会で通用しているコミュニケーション行動評価概念の特徴およびその社会言語学的背景や、それぞれの言語文化圏の価値観や規範を明らかにする。第二に、日中両国の大学生と市民に対して評価概念の意識調査を行う。アンケート調査によって、現実に両国の人々および男女間の意識の類似点と相違点を検証する。

３．研究の方法

研究目的を達成するために、本研究は以下のように進めた：

先ず、対照研究のための基本的な枠組みの設定と各概念について辞書や類語辞典などを調べて、中国の礼儀、文化を紹介されている書類、新聞紙、映画、テレビドラマなどを基本資料に検証し、補足しながら収集したコミュニケーション行動評価語彙を明らかにする。それから日本語の対応関連語彙を収集し，その類似点と相違点が抽出され，中国語の語彙の特徴が日本語との比較の中で明らかにされる。さらに意識調査を中心にして、各調査についての考察を検討する。最終年度は、日中の対照が中心となる。そして、その成果を関連する学会、とくに国際学会で発表する。また、最終的な成果は図書という形式で出版を予定している。

図１.研究の全体像



【研究の基本的枠組みの設定】

本研究では、まず、中国語におけるコミュニケーション行動評価概念①「丁寧」、②「礼儀」、③「親しみ」、④「親切」、⑤「思いやり」、⑥「控える」、⑦「協調」、⑧「順従」、⑨「面子」を中心にして、各概念について辞書や類語辞典などを調べて、それぞれの意味構造の特徴及び対人関係に対する配慮行動の文化の特徴を歴史的及び現実的に観点か

ら明らかにする。認められる定型化された言語表現は、収集したコミュニケーション行動評価語彙を，日本語の対応関連語彙と比較し，それによって現代中国社会と日本社会で通用しているコミュニケーション行動評価概念の類似点と相違点を実証的に明らかにしようと試みる。言葉はそれぞれの国の文化を反映する鏡だと思われる。それらの言語表現は、対応するコミュニケーション行動評価概念に表示してあるため共通の機能を有していると判断できる。その観点から、日本語と中国語が機能上等価とみなすことにする。得られた日中の言語データは、研究目的で挙げた次の枠組みを利用して分類し、対応関係を確認する。

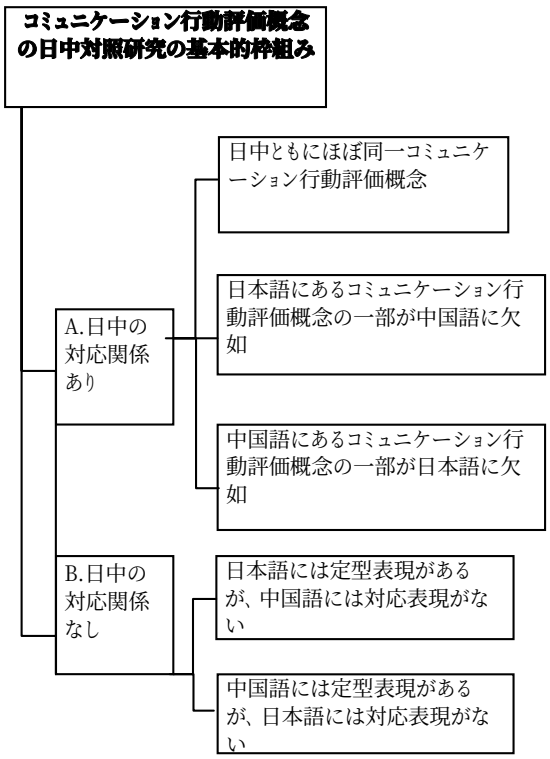


図２．研究の基本的枠組み

この枠組みにしたがって、社会言語学、言語心理学、異文化コミュニケーションの視点から日中言語表現の語用論的、語彙論的、意味論的特徴を対比するわけである。こういった言語情報に着目して分析、比較することで、対人関係に関する配慮の注目点や類似点と相違点を抽出できると思われる。

【資料収集のための共通の枠組み設定】

資料としてのコミュニケーション行動評価概念の語彙と定型言語表現の収集に際しては、まず、辞書収集するデータは、それに基づいて類語辞典などを用いて関連する語彙を補足しながら採取する。さらに，中国の礼儀、文化を紹介されている書籍、人間関係に関わる評価語彙が頻出する可能性の高い新聞記事、映画、テレビドラマなどの脚本も基本資料に利用して考察する。

【アンケート調査】

収集された言語データの中には、その意味や機能が必ずしも明確でないものまた古い情報もある。言葉は時代によって変わる可能性がある。それらについては、アンケート調査や聞き取り調査により、どのような意味や変化が想定しやすいかを確定する。アンケートの対象者は、協力の得やすい日中両国の大学生、一般の市民とする。

４．研究成果

本研究では、コミュニケーション行動評価概念の日中対照研究の基本的枠組みによって，日中言語におけるコミュニケーション行動評価概念①丁寧、②礼儀、③順従、④親切、⑤思いやり、⑥控える、⑦親しみ、⑧協調、⑨面子を中心にして、日本語辞書、中国語辞書と類語辞典、中日・日中辞典など複数の辞書に共通する記述に基づいて、各概念のプラス、マイナス、過剰(マイナス)の評価語彙を収集し、それに基づいて類語辞典などを用いて関連する語彙を補足しながら採取した。調査された日本語の関連語彙と中国語の分布状態と比較し、使用される語彙や定型的言語表現を上記の枠組みを利用してさらに分類・考察し、日本語と中国語の語彙の特徴がその比較の中で明らかにされた。調査結果について、両国のそれぞれの評価語彙は共通の語彙は多くみられて、異なるごいも明らかにした。両国のそれぞれの評価語彙の特徴を検討することにより、現代のグローバル時代、異文化コミュニケーションの誤解の解消が持つ意味を多面的に明らかにするのが、この問題設定の狙いである。今回の研究は「異文化とコミュニケーション行動評価概念」の学問の関心を喚起することができればと考えている。

辞書の語義記述を用いて評価概念の語彙を分析する上に、また中国語の礼儀、文化が紹介されている書籍等で補足しながら関連語彙を収集し，日本語の対応関連語彙と比較した。それぞれの類似点と相違点及び対人関係に対する配慮行動の文化の特徴を考察した。それによって現代中国と日本社会で通用している評価概念の特徴およびそれぞれの言語文化圏の価値観や規範を実証的に明らかにしようと試みた。それぞれの意味構造の特徴及び対人関係に対する配慮行動の文化の特徴を歴史的及び現実的に観点から明らかにした。

例えば日本語と中国語の【親切】という意味を含有する評価概念を解明することを目標に分析を試みた。本研究での辞書を調査した考察から明らかになったことは、日本語「親切」と中国語“亲切”の意味構造と概念は異なるという事実である。日本では対人関係や社会関係の中で、他人の目または集団の

人格的価値や社会的に優れた評価を気にして恥をしり、同様に対人接触における他人の気持ちを重んじると言えよう。日本語における「親切」では、「思いやり」や「人情」がその意味の中心に関わっていることが目立った特色である。中国では社会的な評価と同様に対人接触における個人的な情意や信義を重んじると言えよう。中国語における“亲切”では、“亲”“关”“热情”がその意味の中心に関わっていることが目立った特色である。つまり、【親切】というコミュニケーション行動の肯定的な評価概念は中国人と日本人にとって社会での対人関係や日常生活におけるコミュニケーションを円滑に行う行為の重要な役割を果たす働きをするものとも考えられている。

辞書を調査したかぎ、【親切】の概念は日中国民の意識に強く存在し、さまざまな表現や類義語や同義語や反義語があることがわかった。【親切】に関する、両言語間の翻訳語を調べた結果、様々な言い方、特にコミュニケーション行動評価概念のプラス評価と期待よりもその程度が低い場合の否定評価及び過剰マイナス語彙は明らかになった。その【親切】に関わる言葉は一つの側面から、両国の社会文化と慣習風俗のある風貌と特徴を反映している。自分に対する他人や世間の評価を気にするということを立証する表現でもある。しかし、日中両言語に「親切」“亲切”の漢字はあるが、日中両国にはそれぞれの用法があって使い方も同じではない。例えば日本語は「不親切」という言葉があるが、中国語は“不亲切”という言葉がない。そして、「客に対して不親切である」という表現は中国語に訳すと、“对待顾客不热情”となる。

この研究のもう一つ重要な研究成果は中国の大学研究者たち協力によって、中国人大学生と一般市民に対しての中国語におけるコミュニケーション行動評価概念の意識調査を行った。さらに、日本でも日本人大学生と一般市民にも同様のアンケート意識調査を行った。

2014 年から 2015 年まで、全部 40 問題のポライドネスに関する言葉遣いのアンケート調査及び 65 問題の「面子理論」に関するアンケート調査を行った。調査実施場所は日本国内では神奈川大学、東京工科大学、東京理科大学をはじめ、金沢大学、富山大学であり、中国国内では北京大学、北京第 2 外国語大学、上海同済大学、上海大学、鄭州大学である。収集したアンケートを集計、分析、検討を行った。さらに、一般市民にも同様のアンケート意識調査を行った。このような調査によって、収集したアンケート結果を利用して分類・比較し、その両国の人々および男女のポライトネスと「面子」に対する意識、価値観や規範の類似点と相違点、世代差を明らかにした。その相違点について、その背景的理由をさまざまな要因を語用論、異文化コミュニケーション、社会言語学、言語心理学等視点から考察し、検討した。

例えば、英語の“politeness”に対応する「丁寧」・「礼貌」について、辞書とアンケートによって調査を行った。その結果、辞書記述の「礼」にしたがった行動といった説明であり、共通していった。しかしながら、辞書記述の「礼」は、もっぱら謙虚な態度と具体的な中身のない礼儀にのっとった行動を意味しているに過ぎない。形式的なアンケートによる連想調査に関しては、連想する内容に言語による違いがあることがわかった。

日本語の「丁寧さ」に関して、【言葉】への注目度が高い。このカテゴリーだけで 4 割近くに達する。日本語で「丁寧さ」を表わす象徴的な現象は敬語や挨拶表現などの言語表現のようである。これは、日本社会で規範とされる敬語使用と密接な関係がある。この結果により、場面や立場に応じた言語が適切使えることが期待されていると考えられる（井出ほか，1986; cf. Haugh & Obana, 2011）。中国人学生は【言葉】に注目している度合いが高い。その理由は礼貌用語を使うことを提唱する運動の成果ではないかと推測される。また、中国は【教養/上品】にも着目している。これは、対人行動において、「礼貌」を体現するような行動を肯定的に評価し、自分もそのように見てもらいたいという願望の反映だと解釈される。日本語の言語によって基本的なコミュニケーションにおける関心や注目点が異なるということである。日本・中国はその歴史的経緯から文化的背景を共有していたという過去があるので、対人コミュニケーションの仕方も同様であろうと考えがちである。

ところが、本研究が示唆するような違いは、このような考えが少なくとも現代においては思い込みに過ぎない場合もあることを認識させ、日中間の異文化間コミュニケーションにおける期待のズレを説明するのに有効である。

コミュニケーション行動には、基本的で友好的な人間関係を構築し、維持していく必要がるので、そこで注目すべき点には共通点もあろう。これまでの研究はそのような共通する点を出発点にするのが普通であった（いわゆる「ポライトネス研究」）。しかし、基本的で社会的な人間関係自体を構成するための着目点に文化的な違いがあることがわかった。

本研究は「面子」について、辞書とアンケートによって調査を行った。その結果、辞典調査により、日本語と中国語には【面子】を表す言葉は様々な言い方があるが、【面子】の構成要素や意味構造や概念は異なることがわかった。日本語で「メンツ」を意味する言葉としてよく使われるのは「顔」「面目」「体面」であり、メンツの意味構造は「面目」「体面」「名誉」という三大要素で構成される。日本語の「メンツ」は個人的な感情というより

「他人から見られた場合の社会習慣や社会的価値観に基づく評価」を意味しているといえよう。それに対して、中国語の【面子】意味構造は「面子」「情面」「体面」という三大要素で構成される。よく使われるのは「面子」と「脸」である。中国では社会的な評価と同様に対人接触における個人的な情意や信義を重んじるといえよう。中国語における「面子」では、「面」と「脸」と「情」がその意味の中心に関わっていることが目立った特色である。形式的なアンケートによる連想調査に関しては、連想する内容に言語による違いがあることがわかった。

日本語の「メンツ」に関して、日本人学生は「面目」「世間体」「評判」「体面」「名誉」「体裁」への注目度が高い。中国人学生は「名誉」「脸面」「体面」「自尊心」「尊严」「羞耻」に注目している度合いが高い。Brown & Levinson のポライトネス理論―「Face」理論では、【面子】は日・中の社会で対人関係やコミュニケーションの潤滑油として重要な役割を果たすものであると考えられているが、【面子】の意味を普遍的なものとしてその役割を考えることはできないのではないか。たとえば、「面子の意味構造」と【面子】概念について言えば、辞書上の出現数とアンケートの回答数との間に差があるし、アンケートに即して言えば、日本人と中国人との間の相違、男女間の相違も無視できない。

本研究の一部の成果は、中国および日本、あるいはそれ以外の国々において開催される関連する学会や研究会で報告し、論文としてまとめるとともに、本研究の研究成果を関連学会、とくに国際学会での口頭発表や関連学術雑誌への投稿によって国内外に発信していった。その研究成果は台湾ロシヤ、アメリカ、ギリシア、香港、北京の国際学会での口頭発表、秋田での国際学会での口頭発表、日本国内での口頭発表である。関連学術雑誌への投稿には国際学術雑誌『Intercultural Communication Studies』、『Critical Inquiry in Language Studies』『Inquiries into Korean Linguistics V』、また国内『語彙研究』、『言語文化論業』である。

最終的な成果は、将来、書籍として成果をまとめ、出版する。そして、不明確な部分、もっと研究し続ける必要がある部分は、継続して追及するために今後の研究課題とする。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 12 件）

①陶琳（2016）「コミュニケーション行動評価概念の日中比較―「親切」と“亲切”を例にしてー」金沢大学外国部教育研究センター『言語文化論業』第 20 号　ｐ.71－94 査読無

②陳淑梅・陶琳・佘錦華（2016）「鳥の鳴き声に関する日中擬声語の統計と分析」『日中言語対照研究論集』p.37-54 陶琳・尹 秀美・

③陶琳（2015）「日本語、中国語、英語における呼称の対照研究」金沢大学外国部教育研究センター『言語文化論業』第 19 号　ｐ.59－84 査読無

④陶 琳・尹 秀美（2015）「A Study on the Evaluating Concept of “Politeness” in Chinese and Korean verbal Communication」『Inquiries into Korean Linguistics V』Sponsored by International Circle of Korean Linguistics　Published and made available open access by the University of Texas at Arlington Libraries, 702 Planetarium P1, Arlington, TX 76019 p.81-96 共同発表 査読有

⑤陶琳（2015）「Evaluating Concept of “Face”」『Critical Inquiry in Language Studies』V.5　The Official Journal of the International Society for Language Studies Routledge Taylor & Francis Group p.269-289 査読有り

⑥陶琳（2014）「日本人中国語学習者の学習動機の調査と研究」金沢大学外国部教育研究センター『外国語教育フォーラム』第 8 号　ｐ.81－90 査読無

⑦陳淑梅・陶琳・佘錦華（2014）「日本国内发行的汉语教材现状调查与分析---以有无中国文化介绍内容为中心---（Survey of Current Status of Textbooks for Studying Chinese Published in Japan　---With a Focus on Chinese Cultural Content--）-」『不同语言、文化与政策环境下的汉语教学（Chinese Teaching in Different Language, Culture and Policy Contexts)』上海新世纪出版集团 学林出版社 p.272-294　共同発表 査読有

⑧陶琳（2014）「Evaluating the Concept of ‘Face’ (Mentsu) in Japanese Verbal Communication」『Intercultural Communication Studies』Volume XXIII (1), p.141-153 An Official Journal of the International Association for Intercultural Communication Studies 査読有

⑨陶琳（2013）「丁寧さについて」金沢大学外国部教育研究センター『言語文化論業』第 17 号　ｐ.59－97 査読無

⑩陳淑梅・陶琳・佘錦華（2013）「カルタゲーム方式の中国語アクティブラーニング教材の開発（Development of a Chinese Card-Game-Style Active-Learning Text）」『日本 e-Learning 学会』Vol.13 p.113-122 共同発表　査読有

⑪陶 琳（2013）「The Concepts of “Politeness”: A Comparative Study in Chinese and JapaneseVerbal Communication」『Intercultural Communication Studies』Volume XXII (2), p.151-165 An Official Journal of the International Association for Intercultural Communication Studies 査読有

⑫西嶋 義憲(2012)「「丁寧さ」・「礼貌」・「공손（恭遜)」―“Politeness” に対応する日常的個別概念の日・中・韓比較―」語彙研究会『語彙研究』第 10 号 p.1-12　共同発表　査読有り

〔学会発表〕(計 14 件)
①陶琳（2015)「日本語と中国語におけるコミュニケーション行動評価概念「謙虚」と“谦虚”の考察」日中対照言語学会第 34 回大会 2015.12.20 大阪産業大学梅田サテライト(大阪府大東市)
②陳椒梅・陶琳・舎錦華（2015)「(中国語メデイア文化教材―映画教材の研究―「綺麗なお母さん」)」(2015 年第七回東アジア地域の国際中国語教育大会）神戸学院大学（兵庫県神戸市)
③陶琳（2015)「Face-threatening Acts in Verbal Communication」The 21st International Conference of the International Association Intercultural Communication Studies (IAICS) cum The 11th Biennial International Conference of CAFIC July 14- July 18, 2015 in Campus of the Hong Kong Polytechnic University.
④陶琳（2015)「A Comparative Study of Politeness Strategies in Verbal Communication」8th Annual International Conference on Language & Linguistics, Athens, on 6-9,July, 2015. Athens Institute for Education and Research, Athens, Greece.
⑤郭暁燕・陶琳（2015)「英語に関する日中学習者の学習動機の調査と対照研究」日本比較文化学会第 37 回全国大会　東京　創価大学 2015 年 6 月 13 日（東京都八王子市)
⑥陶琳（2015)「第二外国語としての中国語とドイツ語に関する学習意識調査の対照研究」第 13 回　中国語教育学会全国大会　京都　龍谷大学深草学舎　2015 年 6 月 6-7 日（京都府京都市)
⑦陶琳・尹 秀美・西嶋 義憲(2014)「「礼儀」・「礼貌」関連語彙の日中比較」第 12 回語彙研究会大会　駒澤大学深沢キャンパス百二十周年記念講堂　2014 年 9 月 6 日（東京都)
⑧陳椒梅・陶琳・舎錦華（2014)「针对日本学生的汉语简体字多媒体教材(日本人学生に対する中国語の簡体字についてのマルチメディア教材)」(2014 年第六回東アジア地域の国際中国語教育大会）(上海（中国))
⑨陶琳（2014)「A Contrastive Study of the Perception of “Face”(面子“Mianzi・Mentsu”) in Japanese and Chinese”」The 20th International Conference of the International Association Intercultural Communication Studies (IAICS -2014 Annual Convention) World Conference July 31-Augst 4, 2014 the Providence Campus of the University of Rhode Island, USA.
⑩陳椒梅・陶琳・舎錦華（2014)「日本国内发行出版的汉语教材的探讨(日本に出版した中国語教材の研究)A Study of Chinese text publication in Japan」The 12th BCLTS International Conference on Teaching and Learning Chinese　英国中国語教学研究会年会暨　第十二届高校中国語教学国際研討会 Regents University, London, UK. Wednesday 9 July-Friday 11 July 2014. 共同発表
⑪陶琳(2014)「Evaluating Concept of “Face (Mentsu・Mainzi)” in Japanese and Chinese Verbal Communication”」International Society for Language Studies Official 2014 Conference June 13-15. p.20 (Akita International University)（秋田県)
⑫陶琳・尹 秀美・西嶋 義憲(2013)「“Teinei (丁寧)”, “limao (礼貌)”, and “kongson (공손)”: A Comparison of Corresponding Japanese, Chinese, and Korean Concepts of “politeness” in English」The 2013 International Conference on Applied Linguistics (APLX 2013) (Taibei Techonology University, Taiwan) November 14-15, 2013 共同発表
⑬陶琳(2013)「Evaluating Concept of “Face (Mentsu)” in Japanese Verbal Communication”」The 19th International Conference of the International Association for Intercultural Communication Studies (IAICS -2013 Annual Convention) World Conference October 3-5, 2013 (FEFU Far Eastern Federal University, Vladivostok, Russia)
⑭陳椒梅・陶琳・舎錦華（2013)「Investigation and analysis of Chinese text publication in Japan -With a special focus on the contents of Chinese culture」The fifth Annual Conference of Asia-Pacific Consortium of Teaching Chinese as an international language in 24-25August 2013,in Melbourne University, Australia
共同発表

６．研究組織
(1)研究代表者
陶　琳（TAO,LIN）
金沢大学・人間社会環境研究科・客員研究員
研究者番号：00584004